

学習の流れの例

- ① ガイドに載っている危険について確認する。
- ② 地震発生時、各番号付近にいた場合どうすればよいか考える。
- ③ 自分たちの通学路と照らし合わせて見る。(はまっ子防災 MAP を使い、通学路以外に安全なルートがないかを考える。)

学習後の生徒の姿

外で地震にあったとき状況に応じて適切な行動があることを理解している。

指導のポイント

学校にいるときに起こる地震とは違い、外にいるときに地震が起こった場合、避難の指示を出してくれる先生はいない。したがって、自分で適切な判断ができるようになっておくことが大切だと気付かせたい。

① 火災 ⇨ 本教師用解説書[3]ページ、[6]ページ

③ 橋の損傷

耐震補強が完了していない橋は、落橋や倒壊の危険がある。

参照：駿河大学「かけ崩れや地割れが発生したら」

④ 電線の脱線

電車に乗っているときに地震が来たら、各社で異なるが、電車は地震を感知して震度5程度で止まり、安全点検が終わるまで動かない。復旧にかなりの時間がかかると予想される。乗客は最寄の駅で降ろされることも考えられる。見ず知らずの駅で降りることになるかもしれない。

参照：内閣府防災情報「特集「もしも」のために今、できること」

⑥ ブロック塀の倒壊

正しく施工されたブロック塀は安全と言われているが、基準に満たないブロック塀は倒壊の可能性がありとても危険である。しかし、外から見ただけではどのブロック塀が安全でどれが危険かはわからない。したがって、揺れを感じたらブロック塀から離れると認識しておくことを推奨する。

参照：一般社団法人全国建設コンクリートブロック工業会「ブロック塀大事典」

1章 地震-5

家の外に潜む危険と備え

※イラストはさまざまな危険をイメージしたものです。

大きな地震が起こると、多くの建物が倒壊し、火災のおそれもあります。海沿いの地域では津波、山沿いの地域では土砂災害のおそれがあります。

めあて 外で地震にあったときの適切な行動を理解する。

① 火災
ひとたび火に囲まれると、避難はむずかしくなる。煙や炎を見つけたら、風下をさけて、広い道路や空き地へ避難する。

④ 電車の脱線
脱線・横転・追突のおそれがある。事故現場に遭遇した際は近づかない。線路沿いを歩行中はその場を離れる。

⑥ ブロック塀の倒壊
ブロック塀は、揺れに弱く倒壊の危険がある。揺れを感じたら、すぐにブロック塀から離れる。

② 川の逆流
津波は河川へさかのぼるため、揺れを感じたらすぐに河川から離れ、高台などの安全な場所に避難する。

⑤ 地割れ
自転車では、ハンドルをとられたり、歩行時には転倒するおそれがあるため近づかない。

③ 橋の損傷
白頭から橋を使わないルートも調べておく。落下の危険があるため、橋の上からはすぐに避難する。

⑦ 津波
沿岸の地域は、津波に備えて避難場所と避難経路を白頭から調べておく。揺れを感じたら、海から遠くへ避難する。

⑩ 切れた電線
露出した電線には電気が流れているかもしれないため触らない。触ると感電するおそれがある。

⑧ 頭上の注意(落下物)
ガラスや看板などの落下物に注意。手荷物などで頭を守り、広場などへ移動する。電柱などの倒壊物にも注意。

⑪ 液状化
液状化が生じると、水や砂を噴き上げたり、マンホールが浮き出したりする。地面の状態が不安定なため近づかない。

⑨ 土砂災害
地震で地盤がゆるみ、かけ崩れが起こることがある。斜面やがけからは、すぐに離れる。

⑫ 足元の注意(飛散物)
避難する際は足元にも注意する。ガラスや釘などが飛散している地面を歩かない。

指導のポイント

このページでは、いつも何気なく通っている道にどのような危険が潜んでいるのか、改めて考えてみることで、生徒の危機意識を高めさせたい。安全なルートを考えることで、地震発生時に危険な場所を通して避難することがないように導きたい。他の生徒たちと避難経路を共有する時間を設け、自分では気付かない視点を得られるようにしたい。

⑦ 津波 ⇨ 本教師用解説書[10]ページ

⑨ 土砂災害

落石に注意する。地震が収まった後、時間を置いて崩れる場合もある。

参照：駿河大学「かけ崩れや地割れが発生したら」

⑩ 切れた電線

電線に木やアンテナ、ビニールハウス、看板などの飛来物が触れている場合も危険なので触らない。

参照：中部電力パワーグリッド「災害時の注意点 地震のときは」

⑪ 液状化 ⇨ 本教師用解説書[1]ページ